



石川 健人

■ 第34回芥川也寸志サントリー作曲賞受賞記念サントリー芸術財団委嘱作品

『嗅覚受容体』

2台のキーボードとオーケストラのための (2026)

嗅覚のしくみの解明は他の感覚にくらべ長らく遅れをとっていましたが、1991年のR. アクセルとL. バックによる嗅覚受容体の発見によって、飛躍的な進展を遂げました。

私たちの鼻腔に存在する約400種類の嗅覚受容体は、それぞれがセンサーのように複数のにおい分子に反応し、その反応の組み合わせの違いによって、私たちは数十万種類以上とも言われるにおいを識別しているそうです。

空間に漂うどんな「ニオイ」も「臭い」も、「匂い」も「香り」もその400種類の受容体の反応の組み合わせの情報を脳で統合し、「金木犀の香り」や「カレーの匂い」として知覚しているそうです。

限られた要素の組み合わせから膨大な知覚の差異を作り出す嗅覚のしくみはまた、限られた素材を多様に組織化しようとする西洋音楽の構造的思考とどこか重なり合うところがあるのではないのでしょうか。

本作では、においの「イメージ」をあらわすといった主観的な表現ではなく、こうした嗅覚の原理から得た着想を作曲上の重要なファクターとしてとり入れています。

本作は2台のキーボードを中央に据え、88鍵×2=176個のセンサーをもつ嗅覚受容体になぞらえています。キーボードの音群に含まれる要素はオーケストラによって多層的に拡張(垂直方向に重ねる、水平方向に並べる、あるいは音色や音域を多彩に変化させる、音群に対して遅れて応答する…等)され、派生する無数の組み合わせが作りだされます。その組み合わせの差異を音楽化し、その音像を空間へ広げることによって、嗅覚のしくみなぞらえた音楽を企図しました。

作品は2つの楽章から構成されています。両楽章は核となる要素を共有しながら、キーボードの音色における2つの重要な特徴(打音的要素、和声的要素)をオーケストラはそれぞれに異なるアプローチで拡張してゆきます。

3 Fl (3 Picc) / 2 Ob / E-Hrn / 3 Cl / 3 Fg (C-Fg) — 4 Hrn / 3 Trp / 3 Trb / Tub — 4 Perc (I=Percussion Set: 2 Wood Blocks / Crotales / 3 Metal Pipes / 2 Metal Stuffs / Can / Cowbell / Kick Drum — Crusher / Wind Chime / 2 Chinese Gongs II=Crotales / Metal Pipe / MIDI Pad / Bell Tree / Ratchet / Pitched Crotales / Chinese Cym / Bass Drum / Tubular Bells / 2 Tuned Cowbells / Glass Chime / Shell Chimes / Wind Whistle / Conga / Tri / Guiro / Mokugyo III=2 Suspended Cym / Timp / Xyl / Pitched Crotales / Separated Tile IV=Vib / Xyl / Electric Whistle / Pitched Crotales / Snare Drum) — Hrp — Pf (prepared) / Cel — 2 Soli Keyboards — Strings (14-12-10-8-6)

石川健人 ● Kento Ishikawa

作曲家。音楽外の自身のあらゆる興味と音楽との結び目を探り、その過程で得たあらゆるヒントを、創作のみならず生きる糧としている。主な受賞歴に、第91回日本音楽コンクール作曲部門第1位、第34回芥川也寸志サントリー作曲賞など。2026年度ベルンド・アロイス・ツィンマーマン奨学金を授与され、副賞として同年9月にケルンで自作個展を開催予定。2025・26年度公益財団法人ローム ミュージック ファンデーション奨学生。東京藝術大学大学院修士課程を修了し、現在はケルン音楽舞踊大学に在籍。



中橋 祐紀

■ 第36回芥川也寸志サントリー作曲賞候補作品

『And I sole ear (そして私はただ唯一の耳となる)』 (2025)

初演 2025年9月30日 バリ国立高等音楽院サル・レミー・フリムラン
バリ国立高等音楽院作曲科修了演奏会

私の作曲は、しばしば自然の音響現象を観察することから出発します。木の葉のざわめきや鳥の鳴き声、雨の音に耳を傾けると、私の音楽もそれと同じくらい豊かで、複雑で、そして無垢であり得るのかと、思わず自問せずにはいられません。このような空想から出発して、本作品では、現実世界の音と森林風景への個人的なヴィジョンが入り混じる、想像的で多層的な空間を構想しました。抽象的でリファレンスのない音のオブジェから、私自身が行ったフィールド録音に至るまで、さまざまな素材が組み合わせられ、ある種の「人工的な自然」が形づくられます。そこでは要素と要素が有機的に絡み合いつつも、移ろいやすさ、脆さが表出します。

この作品はまた、ヘンリー・デイヴィッド・ソローの一篇の詩(「When breathless noon hath paused...」から始まる無題詩)にも触発されています。そこでは神秘的な体験が語られます — 真昼の静けさのなかでツグミの歌声を耳にし、その響きにすっかり心を奪われ、世界は忽ちツグミと詩人だけのものになり(世界の「ただ唯一の耳 sole ear」となり)、両者の魂が呼応し、時間と場所から解放たれた状態で、詩人は自然とのつかの間の合一に至る — 。ソローがもっていたとされる、自然と融合し一体となるという魅力的ながら叶うことのない夢は、私の作品において、アンサンブルと電子音響の統合という音楽的な夢に置き換えられています。この二つの根源的に異質な要素は、配置、音色、ハーモニー組織といった水準において融和的に設計されています。

曲の中ほどで登場するソプラノは、ソローのテキストを提示しながら、神秘的世界を導くように空間に変容をもたらします。しかし、最後には再び現実世界に引き戻されます。詩はこのように結ばれます — And I walk once more confounded a denizen of earth. (そして私は、戸惑いつつも地上の住人として再び歩みを進める。)

テキスト(ソプラノによって部分的に歌われる)

When breathless noon hath paused on hill and vale, And now no more the woodman plies his axe, Nor mower whets his scythe, Somewhat it is, sole sojourner on earth, To hear the veery on her oaken perch Ringing her modest trill— Sole sound of all the din that makes a world, And I sole ear. Fondly to nestle me in that sweet melody, And own a kindred soul, speaking to me From out the depths of universal being, O'er birch and hazle, through the sultry air,	Comes that faint sound this way, On Zephyr borne, straight to my ear. No longer time or place, nor faintest trace Of earth, the landscape's shimmer is my only space. Sole remnant of a world. Anon that throat has done, and familiar sounds Swell strangely on the breeze, the low of cattle, And the novel cries of sturdy swains That plod the neighboring vale— And I walk once more confounded a denizen of earth.
---	---

Henry David Thoreau (1817-1862)

Fl / Bs-Fl / Picc / Cl / Bs-Cl / A-Sax / Fg / C-Fg — 2 Trb — 3 Perc (I=Tam-Tam / Vib / Crotales / Bass Drum / 2 Gongs / Wind Whistle / Slide Whistle / 2 Wood Blocks / 2 Suspended Cym / Sizzle Cym / Tri / Guiro / Caxixi II=Tam-Tam / Bass Drum / Tubular Bells / 2 Tuned Cowbells / Glass Chime / Shell Chimes / Wind Whistle / Conga / Tri / Guiro / Mokugyo III=Tam-Tam / Vib / Crotales / Gong / Suspended Cym / Spring Coil / 2 Bongos / 2 Wood Blocks / Metal Guiro / Wind Whistle / Styrofoam Block) — Hrp — Acc — S — Strings (Vn I / II / III / Va I / II / Vc I / II / DB) — MIDI Controller — Electronics

中橋祐紀 ● Yuki Nakahashi

1995年生まれ。富山県出身。東京藝術大学音楽学部作曲科を経て同大学院修士課程修了。現在博士後期課程に在籍。文化庁新進芸術家海外研修制度、ローム ミュージック ファンデーションからの給費を得て、バリ国立高等音楽院作曲科第一・第二課程修了。第76回ジュネーヴ国際音楽コンクール第2位など受賞多数。



金田 望

■ 第36回芥川也寸志サントリー作曲賞候補作品

2群のオーケストラのための
『肌と布の遊び』 (2024)初演 2025年5月25日 東京オペラシティ コンサートホール
2025年度武満徹作曲賞本選演奏会

本作は、日本を代表するファッションデザイナーである三宅一生 (1938～2022) の思想や仕事から着想を得て作曲されています。

三宅の服作りは常に、「身体」と「それを纏う布」との間に生まれる空間や間(ま)の関係を追求することに重点が置かれ、この思想を三宅は「一枚の布」と呼んでいました。この思想をもとに、イッセイミヤケの代名詞である「プリーツ」や「ツイスト」といった技法が生み出され、これらの技法を用いた服は、着る人の体型や身振りにによってさまざまなシルエットと動きを生み出す特徴があります。本作では、そのような特徴や身体と服の関係を音楽化するために、舞台中央に配置されたピアノを「身体」、そのピアノを包み込むように左右に配置された二つのオーケストラを「身体を纏う布」に見立てて作曲されています。

身体を象徴するピアノは、多くの場面で音型動機や音程動機を奏でます。音型動機は上行と下行、音程動機は完全音程と、その転回によって偶発的に生じる2度の音程などで構成されています。これらの動機(身体の動き)は、ピアノを中心に、左右に配置された2群のオーケストラ(身体を纏う布の象徴)へと伝播していきます。オーケストラが奏でる音楽は、折り畳まれたり、縮められたり、引き伸ばされたりする布のように、ピアノの動きや響きを模倣し、時には拡張したり、異なる方向へ展開したりと、さまざまな動きや表情を見せます。

Orchestra 1 (Left): Fl / Ob / Cl / Fg — 2 Hrn / Trp / Trb — 2 Perc (I=2 Congas / Tri / 2 Temple Blocks II=2 Bongs / 2 Wood Blocks / Wind Chime / Mar) — Cel — Strings (6-5-4-4-2)

Pf
Orchestra 2 (Right): Fl / Ob / Cl / Fg — 2 Hrn / Trp / Trb — 2 Perc (III=2 Congas / Tri / 2 Temple Blocks IV=2 Bongs / 2 Wood Blocks / Wind Chime / Vib) — Hrp — Strings (6-5-4-4-2)

金田 望 ● Nozomu Kaneda

1992年生まれ。新潟県新潟市出身。国立音楽大学大学院博士後期課程修了。博士(音楽)。第1回松村賞受賞。2025年度武満徹作曲賞第1位(審査員:ゲオルク・フリードリヒ・ハース)。洗足学園音楽大学、桐朋学園大学音楽学部、桐朋学園大学附属子供のための音楽教室非常勤講師。



山本哲也

■ 第36回芥川也寸志サントリー作曲賞候補作品

『戸外の鳥たちへのトリビュート』
合唱と室内オーケストラのための (2025)初演 2025年8月3日 神戸文化ホール
神戸市室内管弦楽団&神戸市混声合唱団 こどもコンサート2025
『いろとりりの音楽会』(KOBÉ国際音楽祭2025)

私は北信州の出身で、幼い頃から自然の音や虫や鳥の声といった環境音に囲まれて育ちました。当時セキセイインコを多頭飼っていたこともあり、こうして鳥をテーマとする曲を作ることは、当時の記憶に寄り添うような懐かしさを覚えます。

オーケストラによる前奏に続いて登場する合唱の歌詞には、フランスの詩人セシル・ソヴァージュの詩集『サクラソウ』から、「鳥」という単語が出てくる冒頭部分の一節を取り上げました。春の訪れの表現がフランス語で歌われる一方で、オーケストラパートではフランスの作曲家オリヴィエ・メシアンが採譜した鳥の歌の中から、日本の鳥のものを抜粋して引用しています。メシアンは世界中の鳥の歌を楽譜に書き取ってアーカイブするほどの鳥マニアで、1962年の初来日の際にも、軽井沢や山中湖などの鳥の歌を採譜し、自身の作品にも用いています。

後奏は再びオーケストラが中心となり、静かな雰囲気の中で曲を終えます。時折挿入される長い停止は、単なる音の引き延ばしだけではなく、とても繊細な音の揺れや掠れを含み、ぴんと張った一本の糸が震えるかのような音の情景を作り出します。非常にかすかな音ではありますが、緊張が最高潮に達するという点では、曲全体のクライマックスの一つであると言えるでしょう。

本作は神戸市室内管弦楽団・神戸市混声合唱団による委嘱で作曲しました。神戸国際音楽祭の一環として、神戸のこどもたちに初演に立ち会ってもらえたことを誇りに思います。

Arbres qui ouvrez vos bras	腕を広げる木々、
Où le vent bleu se repose,	青い風の憩う場所。
Pêches qui vous endormez	木の葉のなかで
Dans la caresse des feuilles,	眠りを誘う桃。
Oiseaux qui volez à deux	つがいで飛ぶ鳥たち
Et papillons, je suis seule.	そして蝶々、私はひとり。

2 Fl (Picc) / 2 Ob / 2 Cl / 2 Fg (Bird Call) — 2 Hrn (Bird Call) / 2 Trp / Trb (Bird Call) — 2 Perc (I=2 Tam-Tams / Bass Drum / Tri / Wind Chime / Cabasa / Finger Cym II=Vib / Suspended Cym / Finger Cym / Wood Block / Flexatone / Snare Drum) — Hrp — Cel — Chorus — Strings (6-5-4-3-2)

山本哲也 ● Tetsuya Yamamoto

1989年生まれ。長野県出身。国立音楽大学大学院作曲専攻、リヨン国立高等音楽院作曲科、モンス王立音楽院指揮科で修士号を取得。これまでに国内外の30以上もの作曲コンクール・作品公募にて作品が評価されている。現代音楽演奏団体「アンサンブル・リカレンス」音楽監督／指揮者。国立音楽大学非常勤講師。